

《 風貌 》 ～ 真摯な魂 と 輝く目 ～

新渡戸稲造記念センター センター長
 順天堂大学 名誉教授
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」
 会長 樋野興夫

筆者の学生時代の読書遍歴は、「内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄」であった。内村鑑三は「成功の秘訣」10箇条の中で、人生の目的は「品性を完成するに在り」と言っている。まさに、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ロマ書 5章 3、4節）である。内村鑑三は、また、誰もが後世に残すことができる

最大の遺物は「勇ましい高尚な生涯」であるとも述べている。

1860年代遣米使節団（勝海舟らがいた）は、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と 真摯な魂 と 輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「風貌」でなかろうか。「時代を動かすリーダーの清々しい胆力」としての「人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇氣ある行動」（南原繁著の「新渡戸稲造先生」より）の文章が思い出される今日この頃である。

～ 一滴の雨粒 ～

榊原 寛

ビクトール・フランクルの「夜と霧」を読んだ方も多と思います。

ドイツ・ナチスによる強制収容所の様子や過酷労働に駆り立てられてゆく様子、ガス室に連れてゆかれる人々の様子などが書かれています。

雪の日も雨の日も普段と同じように過酷労働に駆り立てられてゆきます。

固い一個のパンと一皿の冷たいスープで強制労働にです。

ある収容所での出来事です。発疹チフスが発生したそうです。バタバタと倒れてゆく人々が出ました。その人々には、固いパンも冷たいスープあてがわれることがありませでした。

ところが、朝早く強制労働に向かう人々の中に、少数ではあるが、病人の枕元に、自分のその日の食料であるパンとスープをそと置いていく人々がいたそうです。

なんと、そういう人々こそ、強制収容所の過酷な労働にも生き抜くことができた、と書かれています。

自らの命に瀕した状態にもかかわらず、他者を思いやることは、他者を生かすばかりか自分も命に生かされるのです。スケールは小さいかもしれませんが、メディカル・カフェの人々の集合体に、そのことを感じるのです。

私たちの存在は、一滴の雨粒かもしれない。でもそれが大河になるのです、というような意味の言葉をマザー・テレサは言ったそうですが、一滴の雨粒でいいじゃないですか。

明日を
考える
ヒント

「君の中には、君に必要なすべてがある。君の求める光は、君自身の内にあるのだ。」

「地上には多くの道がある。けれど、最後の一步は自分一人で歩かねばならない。」（ヘルマン・ヘッセ）